

福井大学教育学部学生に対して開講した、平成5年度の後期教職科目「教育実践研究概論」（教育の方法と技術に関する科目）について、終了した時点での全般的な経過の概要をまとめる。今回は、周到に準備した1回限り（one shot）の授業の検討ではなく、半期全体の流れ、当該学部の他の関連科目との関わりを意識しながら報告をおこなう。

(1) 当該科目について

1. 実施場所： 福井大学教育学部
2. 科目名： 教育実践研究概論（教育の方法と技術に関する教職科目）
3. 当該科目の担当歴： 1年目
4. 形態： 講義（演習および実習を含む）
5. 対象：
 - a. 学部 教育学部（小学校課程、中学校課程および養護学校課程）
 - b. 学年 1年生
6. 種別： 選択科目
7. 受講者数： 133名

(2) 目的

1. 受講生：

この授業の主な受講生は、教職課程を履修している小学校課程、中学校課程、養護学校課程の大学1年生である。彼らは高等学校までの児童・生徒としての学校生活の経験は十分である。しかしながら、1年生ということから、教育実習を含んで教師としての経験はない。

よく誤解されることではあるが、学力面で、ある程度望ましい水準の生徒であるからといって、それは必ずしも良い教師になることを意味しない。それは、例えば、一流のプロ野球選手だったからといって、優れた監督、コーチになる保証がないことと類似しているかもしれない。したがって、この授業では、教師という職業の実際について、生徒から教師への視点の転換作業を含めて、白紙の状態からガンダンスをおこなう必要性があると考えた。それには、ただ教師の仕事を紹介するのでは不十分であり、役割取得行動を含めた指導が必要であると考えた。

2. 当該科目に関連する開講科目：

福井大学教育学部のカリキュラムにおいては、実習的側面に直接的に関連する授業科目の一部は以下のようである。これらはいずれも必修科目であり、履修が卒業要件となっている。

- 2年生後期 教科教育法（2単位）
- 3年生前期 教科教育法（2単位）
- 3年生前期 教育実習事前事後学習（1単位）
- 3年生後期 教育実習（4単位）

今回報告する授業科目は、1年生対象の科目であるため、上記4科目は未履修である。したがって、公式的には、担当教科の教育課程あるいは学習指導要領等の専門的知識については、何も学んでいないことになる。また、教科書分析、教材研究などについても未知の状態である。

3. 授業の目的

今年度の試みにおいては、受講学生の反応をみながら授業の計画を進めた。予測がつかないことから、あらかじめ全体にわたる綿密な授業計画を立てることはできなかった。

以下の点に留意しつつ、授業を進めることにした。第1は、授業の設計・構成力の育成である。第2は、授業・教育・学習の評価能力の育成である。あわせて、自分なりに可能な範囲で資料を活用し、アクション・プログラムを組み、実行し、評価して、次につなぐという力量を育てることをめざしている。

第1の目的のために、できるだけ身近な人物に協力してもらうことを考え、受講学生の2学年先輩にあたる3年生の教育実習風景をVTR視聴という形態で用いた。また、受講学生が作成した指導案に関わって、教育実習受け入れ校である、福井大学附属小学校の教官に1回分の講義を依頼した。これによって、当該授業が、2年後の「教育実習事前事後学習」(必修)、「教育実習」と関連しているという現実感をもたそうと試みた。

第2の目的のために、VTR教材の視聴をさせた。とくに、心理学の観察学習・モデリング理論の援用によって、実習生の立場・視点に立った視聴行動を促そうと試みた。正確な観察、各自の視点に立った指導案作成の試み、これらの点に関連する受講生間の討論と考察の学習活動を重視することを計画し、そのために授業時間中の時間配分に留意した。教師の教授行動に関連する知識・理解の注入よりも、受講生自身が2年後までに何が学習内容として必要になってくるのかの自覚を確立・育成することをねらった。

(3) 教 材

1. VTR教材(その1)

放送教育開発センター制作の教師教育教材、「教師教育教材メディア・ミックスの授業—小学校5年・総合学習—」を視聴利用した。これを採用した理由は2つある。ひとつは、学生への授業テキストの中に、このシリーズが紹介されているためであった。もうひとつの理由は、そのライブラリーの中で、石川県の現職教員が登場していて、これは地理的に福井県に一番近いので、受講学生に親近感を呼ぶのではないかと考えたためである。

2. VTR教材(その2)

受講学生は、小学校課程、中学校課程、養護学校課程に散らばっていた。また、彼らが1年生であることから、専門的知識に関する負担が低いと考えられる教材を扱うことにした。

今回は、小学校1年生「算数」の一部を例にとった。これは、開講の約1カ月ほど前におこなわれた学部3年生の主免実習のひとつまでである。この授業では、録画・録音状態が

よかった。また、その実習生から、授業利用への快諾を得ることができ、当日の指導案の提供も受けることができたためでもある。このほかに、附属小学校3年生「社会」における教育実習VTRも利用した。

なお、福井大学においては、主専攻の課程の校種にあたる教育実習（主免実習）は学部3年生段階で9月当初から1カ月間おこなわれている。

3. 印刷教材

大野木裕明・森田英嗣・田中博之（著）『教育の方法と技術を探る－教育工学・教育心理学からの接近－』（1991年、ナカニシヤ出版）を用いた。この本は、専門の異なる3名の執筆者がまとめたものである。章立ては、以下のような構成になっている。

序章 本書の概観と構成

I 授業の設計と学習指導

1章 学習指導の方法

2章 認知心理学に基づいた授業

II コンピュータと教育メディア

3章 マルチメディア教育

4章 コンピュータを利用した学習

III 教育評価とテスト

5章 学習の指導と教育の評価

6章 評価資料収集の方法

7章 テストの利用と作成

(4) 学生の教職への意欲について

福井大学教育学部は教員養成系学部の一つではあるが、同系統の他大学と同様、近年、必ずしも入学学生の全員が教職を志望しているわけではない。大野木・吉田（1993）は、当該学生の1年上級生（現2年生）に対して彼らの入学時における入学動機、教師イメージ等を、質問紙調査法によって調べ、それによって現状分析をおこなった。それによると、入学志望の理由「教員になりたいから」に対して5件法で回答したうちの2つのカテゴリー、「まったくそのとおり」「ややそのとおり」の合計百分率は、小学校課程学生で82%、中学校課程学生で50%、養護学校課程学生で76.2%であった。「ややそうではない」と「まったくそうではない」の2カテゴリーの合計では、小学校課程で6.7%、中学校課程で24%、養護学校課程で19%であり、これらは入学の段階で否定的になっていることをうかがわせる。これに対して大学サイドでどのように対処していくかは、本稿では述べないが、科目担当者としては、受講生が教職科目、教科教育法、教育実習等の履修によって、実感をもって教職をめざすことを期待する。したがって、教師に近い視点から実際の授業風景を見させる経験を用意すべきであると考えた。

(5) 授業の基礎として援用した理論

心理学的な理論として、スタンフォード（Stanford）大学のアルバート・バンデューラ

(Bandura, A.) 教授が提唱した、社会的認知理論の一部を援用した。この理論の概説と最近の動向の紹介は、大野木・伊藤・中沢 (1987)、中沢・大野木・伊藤・坂野・鎌原 (1988) で述べ、また本報告書の別の所でも伊藤秀子によって論じられているので、ここでは述べない。今回の授業に限定して解説すると、援用した部分は、よいお手本 (model) あるいは標準的なお手本 (model) を観察的な方法によって見習い、あるいは自分なりに取り入れて、その行動パターン・観点等を身につけるという学習方法である。この学習方法は、観察学習 (observational learning)、あるいはモデリング (psychological modeling) と呼ばれている。日本文化や (大野木, 1984 a)、職人教育 (大野木, 1984 b) 等、日本においては違和感のない学習方法である。

ここでは、教育実習生の教授行動を V T R によって観察・視聴することによって、(1)教師としての観点に立つことに馴染み、(2)教師として授業をおこなうためには、最低限、どのような点に留意すべきであるか、を受講生各自に考察させようとした。とくに、直前に 2 学年上級の先輩が授業をおこなっている風景を V R T 視聴することは、大学キャンパスにおける授業時間に、現実感・必要感をもって臨む効果をもつのではないかと考えた。

また、先輩学生の実習 V T R を視聴させることに関しては、もう一つの効果も期待している。それは、教育実習不安の低減である。大野木・宮沢 (1992) にまとめたが、教育実習に臨む学生の間には、実習体験に対して心理的な不安を示す者がいる。実習体験への不安には、少なくとも、「指導・技能・能力への不安」「対児童・生徒関係の不安」「学校環境への不安」「教師としての身だしなみへの心配」の次元がみられるが、これらの一部は、不必要でノイズでしかない不安である。身近な学生の実習 V T R を視聴することは、実習体験への漠然とした不安、あるいは消極的な態度を解消する効果をもつものと考えた。そして、そのような効果をもちそうな授業 V T R を経験的な観点から教材として選択した。

(6) 授業における指導案の作成

講義科目ではあるが、受講学生には、指導案の作成作業を課した。さらに、教育実習受け入れ校になっている福井大学教育学部附属小学校の教諭 1 名に大学にきてもらい、講義中に、その指導案の一部を批評してもらった。

この授業では、自分がおこなう授業の指導案の作成作業を、問題解決行動と見立てている。したがって、大学キャンパス内の授業の中で、自分なりのアクション・プログラムを、指導案という形で現実化させることによって、彼らのメンタル・トレーニングの場を提供していることと考えた。

(7) 授業の概略

授業は、結果として、12回 (90分) と最終レポート 1 回 (13回目の一部含む) であった。以下に、内容の概略をまとめる。

1. 第 1 講 (10月14日)

この科目の性格づけと事務的手続きをおこなった。具体的には、(1)教職科目「教育の方

法と技術」の一つであること（『履修の手引』の解説）、(2)用いるテキストの紹介とその使い方、(3)講義担当者の自己紹介、(4)講義全体の進め方、(5)成績評価の出し方について述べた。その後、その教室で、受講登録の事務的作業をおこなった。時間中に人数が次々と増加し、教室の移動をおこなったので、そのために時間をとってしまった。

当日の学生への配布資料は用意しなかった。

2. 第2講（10月21日）

まず、教育実習不安に関する質問紙調査を実施した。これは、講義内容とは無関係であるが、3年の「教育実習事前事後学習」（必修）と関わる内容であり、2年後の主免実習直前の時点での追跡調査のために実施している。なお、前回と同様、この講義が、「教科教育法」「教育実習事前事後学習」等とともに、実際の実習に深く直結する授業科目であることを述べた。

次に、約1カ月前におこなわれた、ある3年生女子学生の主免実習（附属小学校3年生「社会」）ビデオを視聴させた。そして、事後に、座席の近くの学生同士で、視聴の感想、あるいは実習生の授業方法の改善策をブレイン・ストーミング（brain storming）させた。作業の内容についての要約や文章による提出は課さなかった。

当日の学生への配布資料は用意しなかった。

3. 第3講（10月28日）

前回と同時期の別の3年生男子学生の主免実習（福井市春山小学校1年生「算数」）のビデオを視聴させた。視聴の前に、学生には、配布した所定の用紙にエッセイを書かせ、時間内に提出させた。

エッセイの課題は、以下の3点であった。

- (1) この授業の学年、教科は何ですか。
- (2) この教師の、児童に対する態度や言動のよい点を書きなさい。
- (3) あなたが、この授業を行うとしたら、どこを改善しますか。

授業担当者サイドの思惑であるが、(1)は学生にVTR視聴への注意を促すこと、およびVTR画面の児童の学年と教科を当てさせることによって相手に応じた教授行動の様子に着目させることであった。(2)は、視聴学生に、実習生と同じ視点に立って、代理的に実習教師の行動パターンを学習し、さらに現在の自分の視点に立って実習教師の教授行動パターンを評価する学習を施すことであった。(3)は、2年後に各自が実際に実習をおこなうわけであるから、自分なりに具体的な事態で考察をし、また自覚を表出させることをねらった。

一例を資料1に示す。どのような点について言及しているかという内容分析をすることによって、当初の狙いがどの程度達成されたかの考察ができるかもしれない。ただし、具体的な作業は、まだおこなっていない。

4. 第4講 (11月11日) (11月4日は公務出張のため休講)

最初に、前回に学生が提出したエッセイの結果について、統計的な数値を中心にしてプリントとして受講生に配布した。資料2に示す。VTRでみた実習の対象学年と教科を判定させることについて、正解は小学校1年生の「算数」であることを述べ、さらにプリント中の数値について解説を加えた。前回にエッセイを提出した受講生の人数は、1年生が109名、2年生以上が24名の合計133名であり、最初の受講状態と比べると若干の減少がみられる。なお、これまでには、出席点呼は一度もおこなっていない。以後もおこなわなかった。

次の作業であるが、引続いて、受講生に対して、教科書における該当箇所のプリント(資料3)を配布した。そして、前回の同一VTRを、もう一度、視聴させながら、「ながら視聴」のもとで、各自に、この実習生の指導案を想定した授業の流れ図を要約させた。回収した一例を、資料4に示す。ここでは、できるだけ正確に、実習生の教授行動を観察することを学習目標としている。回収した観察メモの内容分析によって、受講生の観察能力を考察することが可能であるが、現時点ではまだ検討作業に至っていない。

以上、当日配布した資料は、前回の学年教科あてクイズの集計結果(A4 1枚)、VTR視聴の流れ図作成作業のメモ回答用紙(B4 1枚)、VTRの授業で取り扱った該当単元の教科書のコピー「おおきさくらべ」(B4 2枚 4頁)であった。

5. 第5講 (11月18日)

10分程度を費やして、前回までの授業の経過を口頭で簡単に要約・整理した。次いで、まず、受講生の前回のVTR視聴の観察メモ用紙を返却し(コピー済み)、さらに、教科書指導書における該当箇所の解説を抜粋したプリント(B4版1枚、資料5)、および指導案の該当箇所のプリント(B4版 2枚 4頁、資料6)を配布した。そして、返却した各自の観察メモと対比して、各自が自分なりの対比メモを完成させるように指示した。その際、テキストの第1章「学習指導の方法」を読ませ、各自の考察の参考にするように指示した。とくに、受講生相互に議論して批判しあう作業をおこなうように強く勧めた。座席はごった返し、騒然とした状態になったが、あちこちで小グループになり議論・討論しているので、そのまま作業を継続させた。時間が経過した時点で、いったん、対比メモを回収し(コピーのため、資料7)、次週は各自で独自の指導案を作成することを予告して散会した。

6. 第6講 (11月25日)

前回の対比メモを返却し、前回に予告したように、時間の最初から、対比メモおよび当日配布の諸資料(福井大学教育学部が作成した『教育実習の手引』より抜粋コピーした指導案(B4版 6枚 掲載省略)、および実習VTRの実習生の指導案(資料8)を参照しながら、配布した所定の回答用紙に自分の指導案を作成記入するように指示した。時間内に終了しなかったため、次回も継続することを予告した。作成中の用紙は回収しなかった。

7. 第7講 (12月2日)

前回の作業の継続を促した。授業担当者は机間巡視をおこなったほかは、特別な解説や指示はおこなわなかった。当日の新たな配布資料はなかった。時間の終了を待って、作成した指導案用紙を回収した。一例を、資料9として示す。回収した指導案用紙から、課程に留意して5件を選び、附属小学校K教諭に批評を依頼した。

8. 第8講 (12月9日)

テキスト第1章、「学習指導の方法」に関して、講義をおこなった。提出された指導案は、附属小学校K教諭にコメントを依頼中のため、その旨を学生に報告した。各自の指導案は返却した(コピー済み)。

A教官から、全国的規模の質問紙調査の依頼があり、残り時間をその作業の実施に費やした。

9. 第9講 (12月16日)

附属小学校K教諭(当年度の教育実習担当者)が、5名の受講生の指導案(省略)に対する批評をおこなった。K教諭は、NHK教育テレビの学校放送番組「いちにのさんすう」の該当部分のVTRを利用し、授業の構成を中心にして解説をおこなった。3年生の男子学生(VTRモデル)は、講義受講時間と重なって、この時間には来ることができなかった。

これより曜日的に冬休み期間に入ることもあり、以上をもって、当初の第1の目的である、授業の設計・構成力の育成に関する授業内容を一段落とした。その旨、学生にも説明した。

10. 第10講 (1月20日)

年あけて、残り4回程度となり、第2の目的である、授業・教育・学習の評価能力の育成についても取り扱うことにした。時間数に限りがあるため、映像利用教育、授業の評価を中心にして、残りの時間を使うことにした。

この日は、テキストの第6章「評価資料収集の方法」、および第7章「テストの利用と作成」について、講義をおこなった。次週は、各自に高校入試の模擬テストを実際に解答し、それを基礎としながら、設問、配点、観点別評価、5段階評定、平均・標準偏差などの解説と実習をおこなっていくことを予告した。

11. 第11講 (1月27日)

中学校3年生対象の学力診断模擬テスト「国語」を実施し、受講生全員に解答作業を課した。これは、業者テスト廃止後、福井県中学校校長会が初めて秋に実施したテストである。この日におこなったのは、第1回目の問題で、古文・漢文が含まれていない現代国語中心のテストであった。

テスト問題は、地元紙に掲載されたものをB4版表裏に拡大コピーしたものを用いた。

解答用紙は、同じく掲載された正解表について、正解をホワイトで消し、解答枠をそのまま生かして拡大コピーしたものをを用いた。

終了後、正解・配点表を配布して、各自による採点作業を課した。残り時間を用いて、テキストを利用しながら、記述式テスト・客観的テストといった形式等の解説を加えた。

12. 第12講（2月3日）

放送教育開発センター制作「教師教育教材メディア・ミックスの授業—小学校5年・総合学習—」を視聴した。そして、ビデオ内容に関する印刷教材の部分的コピーを配布した（省略）。箇所はメディア・ミックスに関わる部分等であった。テキストをも解説しながら、VTR利用の授業設計について講義をおこなった。

最後に、レポート課題用紙を配布し、レポート提出をもって講義が終了することを告げた。また、当日までに、全体に関する質問があれば受け付けることを予告した。

13. 第13講（2月10日）

研究室前にレポート提出場所を確保し、朝から受講生のレポートを受け取った。一例を資料10として示す。7名の学生から、レポート内容についての質問があり、それに対応した。以上をもって授業を終了した。

(8) まとめにかえて

「教育実践研究概論」という教員養成系学部にあふさわしい名称であるが、担当者にとっては、能力的に非常に心許ない面があった。もとより半期で包括的な講義ができるわけもなく、また、概論の存在そのものについての疑問も否定しきれない。方法論も明確でなく、1年生配当科目であることにも多少の違和感がないわけではない。さらに、この科目が以後の関連科目とどのように結び付くのかについての展望も、そういった議論の機会もない。

このような現状から、本稿では、科目担当の試みのなかから、こういった問題を考えてみたいと思った。したがって、かなり、福井大学における特殊事情に言及して、他大学の類似科目の実践とは比較検討の対象にならないかもしれない。その点、お詫び申しあげる。

ここでは、あまりに大きな問題を述べることは避けて、小さな具体的な点について、記録にとどめておく。

1. 受講生の人数について

今年度は時間割の関係上、他の教職科目と比べて受講生が多く、個々の学生に直接的・個別的に対応することが困難だった。作業、演習、討論の時間を設定することによって、担当者なりの工夫をしたつもりであったが、不十分であることは否定できない。また、個人的な力量から、この種の科目を週に4～6コマ程度担当するとなると、そうとう困難を覚える。筆者の場合、報告書を書くことを前提に授業をすすめたので、受講生の学習作業内容を用紙で回収し、その読みとコピー・返却だけで、そうとう時間を消耗した。

毎回の授業終了後に受講生から必ず質問や話しかけがあり、その頻繁さや彼らの関心

の高さに驚いた。これは、筆者の「心理学」「教育心理学」「学習心理学」「発達心理学」等の担当経験からは想像できないことであった。

彼らは聞くよりも自分の考えを話したがっているのではないかとの感触を得るほどであった。ただし、担当者としては、適切なタイミングをみての新奇資料の提示や、議論・考察が深まるような方向づけが必要であると考え。そして、これは、簡単ではない。

2. 先輩の授業VTRへの視聴について、受講生の視聴態度は非常に真剣であった。内容を見ながら笑いが起こる以外は、必修科目の前・後期テスト中のように静まり返って、集中して視聴していた。これには、担当者の講義能力の力量に疑問を感じるほどであった。
3. 授業VTRの観察に、代理的な参加といった思考活動を含む視聴態度を確保したいと考えた。今回は、「授業ビデオの正確な記録作業」→「自分が指導する場合」を想定しての視聴といった、モデリング・観察学習過程を想定してセッティングしてみた。学生側の反応をデータとして押さえてはいないものの、経験的な見地から彼らの作成した指導案をみると、これは効果的であったと判断できる。この分析を今後も課題としたい。
4. 今後の課題であるが、このようなVTR視聴の利用法を確立するために、学生どうしのグループワーク、個別作業といった、いくつかの教授・学習方法を設定し、アクション・プログラムを開発することが、現実的な意味で重要と考える。3年生前期の「教育実習事前事後学習」では、その試みの蓄積があるので、これと連動する方法を模索したい。
5. 今回の授業では、観察による授業の評価、テスト問題作成と評価などの問題については、少ししか触れることができなかった。大野木(1994ab)でも検討したが、教育学部のカリキュラムでは、このような側面はそれほど熱心には扱われていない。また、現職教員についても、不安が残る(大野木・杉村, 1992; 大野木・前田・藤田, 1994)。むしろ、教科教育法等において、各教科の具体的な内容と直結した取扱いの方が教育的な効果をもつのではないかと考える。

引用文献

- 大野木裕明 1984 a 伝統工芸士の学習過程—若狭めのう細工に関するノート— 椋山女学園大学研究論集 15(2), 43-54.
- 大野木裕明 1984 b 『昔話とモデリング』 名古屋：中日文化
- 大野木裕明 1994 a 『テストの心理学』 京都：ナカニシヤ出版
- 大野木裕明 1994 b 教職用教科書に見られるテスト形式に関する解説の比較検討 岐阜：(財)総合初等教育研究所紀要 第3集 (印刷中)
- 大野木裕明・伊藤秀子・中沢潤 1987 モデリング理論の最近の動向—日本の現状— 心理学評論 30(2), 129-142.
- 大野木裕明・森田英嗣・田中博之 1991 『教育の方法と技術を探る—教育工学、教育心理

学からの接近一』 京都：ナカニシヤ出版

大野木裕明・杉村伸一郎 1992 現職教員は教育評価方法の専門用語をどの程度知っているか
福井大学教育学部紀要（第Ⅳ部） 43, 81-107.

大野木裕明・宮沢秀次 1992 教員養成系学生の教育実習不安と教育観に関する調査的研究
福井大学教育学部紀要（第Ⅳ部） 44, 59-82.

大野木裕明・吉田祥造 1993 教育学部新入生の入学動機と教師イメージに関する調査的研究
福井大学教育学部紀要（第Ⅳ部） 45, 63-83.

大野木裕明・前田洋一・藤田剛史 1994 中学生の教師作成テストの実施目的に関する調査的
研究 福井大学教育学部紀要（第Ⅳ部） 47, 15-31.

中沢潤・大野木裕明・伊藤秀子・坂野雄二・鎌原雅彦 1988 社会的学習理論から社会的認知
理論へーBandura 理論の新展開をめぐる最近の動向ー 心理学評論 31(2), 229-251.

学年 1年 課程 中学校課程 番号 26番 名前	この授業の学年、教科は何ですか。 この教師の、児童に対する態度や言動のよい点を書きなさい。あなたが、この授業を行うとしたら、どこを改善しますか。 1年か2年生 算数
<p> すごく見てて、気持ちよかったとか、楽に見れたとか、安心して見れました。まずは、子供たちに合わせて、ゆっくりと大きな声でしゃべっていることが1番いいと思いました。やはり、はっきりと子供に伝えることが大切だと思うし、大きい声だと、あきてこない授業になると思います。あと、初めてとは思えないほど、肝がすわっていて、私は、すごく好きな授業風景に見えました。 </p> <p> 小道具などを使って授業するのも、目で見ても分かるようには、最高だと思います。これを見てると、自分が小学生だったころにきた教育実習生を思い出します。やはり、笑いかぶるのは、子供も楽しんでる、てことだから、内容も大切だろうけれど、雰囲気とか先生自身も重要になってきて、いいんじゃないかな、と思います。 </p> <p> 私は、改善しなくても、いいものだと思います。私は、すごく気に入った授業で、見てよかった、と思います。常に子供たちの意見を聞いてあげられる先生だと思いました。すごくよい見本になるのではないのでしょうか？ </p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;"> 1人で授業を進めているのではなくて、生徒と会話をしているように進めていた。 </p>	

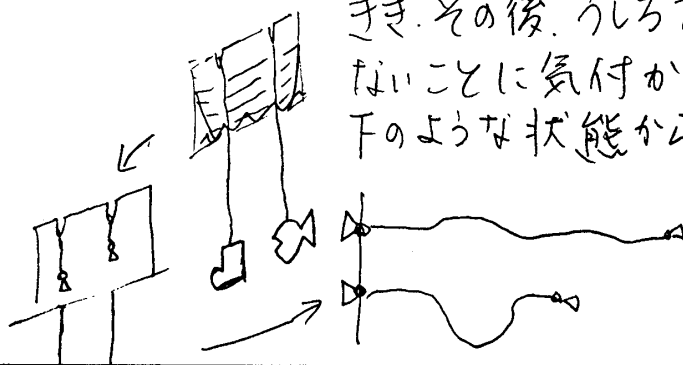
資料1

<p>学年 1 課程 小学校 番号 77 名前</p>	<p>この授業の学年、教科は何ですか。 この教師の、児童に対する態度や言動のよい点を書きなさい。あなたが、この授業を行うとしたら、どこを改善しますか。</p>
--	--

1学年の算数。

- ・授業を進めることで頭がいっぱいで、少し余裕がないように見える。^{たけ言ってくれ}
- ・もう少しゆっくり、しっかり子供の話を聞いてあげればよいと思う。^{ほかに}
- ・大事なポイントとかは、しっかり聞かせるようにして良いと思う。^{きいているから}
- ・1人1人の名前をちゃんと覚えていて良い。^{ここはちゃんと聞いてね}
- ・子供にくだけた話し方や態度で接しているのでクラス内がリラックスしているからよい。^{かろ}
- ・授業のはこみ方、子供の興味・関心のひき方が上手いと思う。^{なじみのある鉛筆とか、ハガキとかを使ったりする導入に}
- ・クラス全員の1人1人に目かくはれていないように思う。
- ・子供が話している時はさえぎらないほうがよいと思う。
- ・授業のほり方は、みんなで行った散歩のことから入っていて、良いと思う。
- ・一人の意見を聞くだけだったので、ほかに”と聞く前に、〇〇さんの意見やけどみんなどう思う？”とかもって、クラス全体に解答を求めても良い質問もあったと思う。

ひもの長さをはかる時は、はじめから、こう見せとして、どちらが長いか



きき、その後、うしろを見せて、はしがそらて、
 ないことに気付かせ、次に黒板にはって
 下のような状態から、まっすぐのはず、ということ
 に気付かせるという
 ふうに段階をふんだ
 ほうが良かったと思った。

資料2

「教育実践研究概論」第3講におけるビデオの学年・教科あてクイズ
集計結果

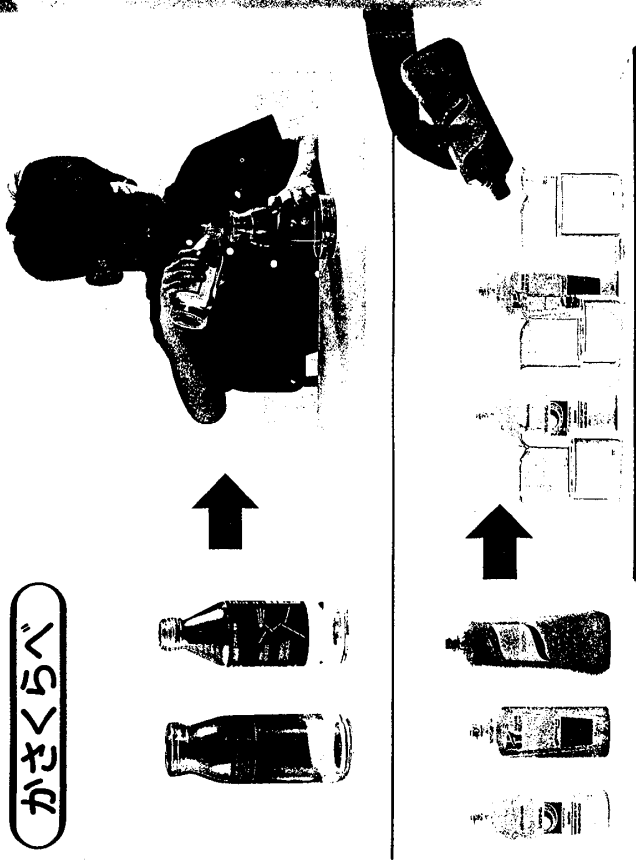
回答者↓	予 想 学 年	予 想 教 科
1年	1学年 2学年 他学年 無・複数回答	算数 その他 無回答
情報	1	1
小学校	47 9 2 6	61 2 1
中学校	21 3 5	25 3 1
養護学校	8 6 1	15
2年以上	1学年 2学年 他学年 無・複数回答	算数 その他 無回答
情報	1	1
小学校	5	5
中学校	9 3 1	13
養護学校	3 1 1	5

133名の回答

資料 3

【出所】啓林館 1年生「さんすう」(教科書)

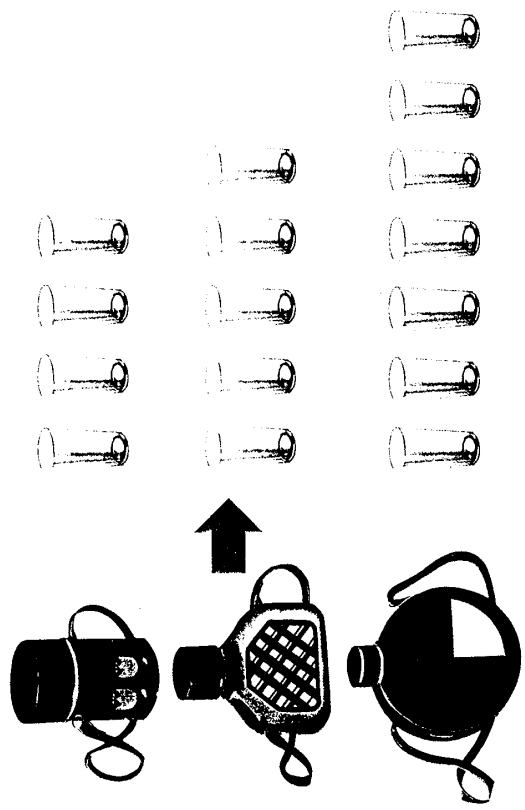
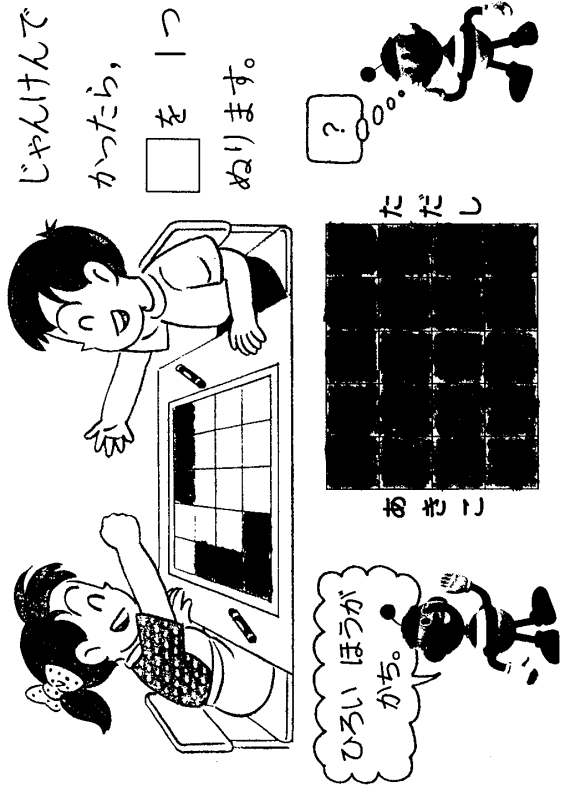
かさくらべ



ひろさくらべ



ばしょとりあそび



資料3

【出所】啓林館 1年生「さんすう」(教科書)



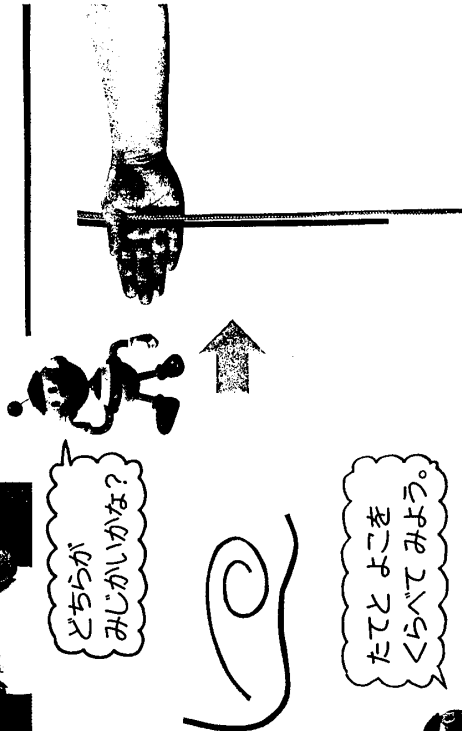
おおきさくらべ

ながさくらべ

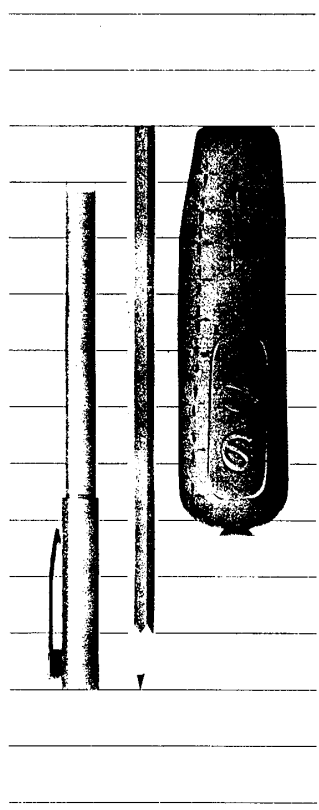
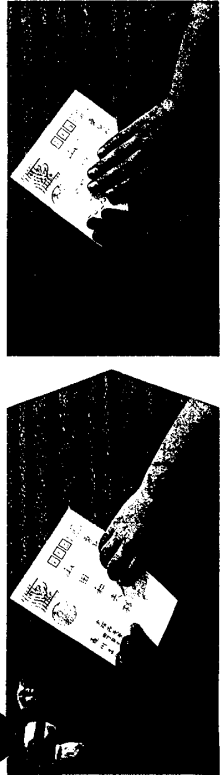
どちらが
ながいかな?



どちらが
みじかいかな?



たてとよこを
くらべてみよう。



11月 11日 課程 中・音 学年 1 番号 26 名前		ビデオを視聴して、授業の流れをメモしなさい。
時間	教師の指導(児童の学習内容)	発問・指導事項、備考
9:40	天気 → 外で見つけたもの “長さくらべ”という タイトルをよして、 これかろ学ぼうとす ることを教える	2本のすずきをよってきて、長さくらべをしてみる。 生徒簿に意見を聞く 1 大きい模型の鉛筆を使って、生徒簿に意見を聞く。 ↓ ・ いるんな子にあてて、1人ずつ前によさせて、長さくらべをさせしてみる ・ 生徒簿に発表の場をもたせてあげる (自分の持っている鉛筆の1本を隣の人と比べ、それを見回ってあげる。 2 魚釣りの系の長さくらべをしてみる。 ・ ここで、いるんな子にあてて1人ずつ前によさせる。
9:45		
9:50	黒板を使って指導 (磁石付きの絵を使って) “長さくらべ”の楽しさを大きくしようとする	
9:55	目で見えて分かってもらうように、常に実物を使ったりしているようだ。	

10:00	「後ろにいる先生に分かってもらうためには？」 黒板で系の長さくらべを 実証	さらに質問を迫る
10:05	“たてとよこ”を教える ために、手紙を配る	生徒の意見 なんでも生徒にやらせる場を 与えているようだ。 3 手紙を使って、長さくらべ ↓ ・ 生徒簿に意見を聞いてみる ↓ 配った紙を使って、たてとよこの長さくらべを せてみる 生徒簿と、しよに先生も 同じようにやってみる。
10:15	そろそろ、まとめに 取りかかると。	
10:20		
10:25	最後に、鉛筆、ひも、 はかきを使って、長さ くらべのまとめをする ↓ 配った紙に メッセージを 書かせる。	

第1時

資料5
⑨ おおきくらべ
(6時間)

【出所】啓林館 1年生「さんすう」(指導書)

【本時のねらい】

具体物について2つの長さを直接比べる方法をくふうし、長さを測る。


【展開別作成のポイント】


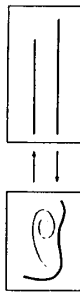
児童は、すでに日常生活でいろいろな量について、その大小を意識したり比べたりする経験をもっている。したがって、就学前の多様な経験などを正確にとらえ、(注：児童の実態は事前に、教科書の課題に即して調べておくことよよい)それに対応できる具体的な活動や操作をくふうし、児童一人ひとりに充実した学習を組み立てたい。

ここでは、測定的基本的な指導として、AとBの長さを直接的に比較する学習である。長さは、重さや時間などと異なり、目で見たり、手でさわって操作できるので、児童の生活にいちばん多く現われている。しかし、「長さ」ということには、あいまいさがあり、2つの長さの量を比較して表す場合と、ものさしで測った測定値を表す場合の2通りがある。ここでは、前者の学習なので、長さを比較する操作を何回も体験させることで、長い、短いを感覚的、視覚的にとらえる豊かな経験を意図的に積ませたい。年齢的にねん土遊びの好きな時期なので、へびなどを作って、長い、短いを強い合った経験はあるが、はがきの縦と横の長さの比較のように、1つの物の部分と部分を重ねて長さの程度を示す経験は、そう多くはないであろう。したがって、はがきの場合は、縦と横の位置関係、用語の意味を正しく理解させる。縦と横を色分けして示し、比較する観点を明確にするなど学習の手だてを考えた。

準備物
教師：えんぴつ、ひもを貼付した模造紙、はがき(OHP)
児童：はがき、えんぴつ(数本)

◆◆展開別◆◆

学習内容	児童の活動	指導上の留意点
鉛筆の長さ比べ (直接比較の方法) p.52	<p>ながさくらべ はがき えんぴつ</p>  <p>どちらが長いか、はつきりさせるにはどうすればよいでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> どんな比べ方ができるか考える。 直観で比べる。 片端をそろえて比べる。 逆の片端をそろえて比べる。 	<ul style="list-style-type: none"> えんぴつは、一方を縦、一方を横にして提示するなど、直観的に比べられないようにする。 一端をそろえる場合、削ってある先でもよいことを考えさせる。

	<ul style="list-style-type: none"> えんぴつを比べるときには、なぜ端をそろえるか十分話し合わせておく。
<ul style="list-style-type: none"> • 2本のひもを見て「どちらが短いか」を考える。  <ul style="list-style-type: none"> • 直観的に把握できない長さを、比較の方法を話し合う。 • 左の図のように、模造紙にひもを取り付けて貼付し、考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> • えんぴつと同じで端をそろえること、さらにまっすぐ伸ばして比べることをおさえる。
<ul style="list-style-type: none"> • はがきを見て、「縦と横の比べ方」を考える。 • 直観で比べる。 • 重ねる。 • 友だちのはがきを借りる。 • 折る。 	<ul style="list-style-type: none"> • 縦、横の位置関係、用語を正しく理解させてから本題にはいる。 • 縦、横の位置関係や用語の理解に、OHPを利用するのもよい。 • はがきを配付する。一人ひとりの操作のよさを確かめておく。
<ul style="list-style-type: none"> • 数種類の比較 	<ul style="list-style-type: none"> • 3本以上の場合も、同じように比べられることを確かめる。
<ul style="list-style-type: none"> • 本時のまとめ 	<ul style="list-style-type: none"> • 長さの直接比較の方法をまとめる。 • 一端をそろえなると、長さが比較できることを教科書の絵図でまとめる。

◆◆板書計画◆◆

おおきくらべ

ながさくらべ...はしを そろえて ならべる。(かごねる。)



はしを そろえる。(たおしても、たててもよい)

はしを そろえ、まっすぐにする。はしをおいて、かごねる。



第1時 ねらい

⑨ おおきくらべ (6時間)

準備 (教) 鉛筆、ひも、古はがき (児) 古はがき

2本の鉛筆について、どちらが長いかを予想させ、くらべ方を話し合わせる。
・端をそろえてくらべればよいことに気づかせた後、実際にくらべらる。
・筆箱の中の鉛筆をくらべたり、となりどうしてくらべさせるとよい。

2本のひもについて、どちらが短いかを予想させ、くらべ方を話し合わせる。
・端をそろえてくらべればよいことを確かめた後、実際にくらべさせる。
・「長い」「短い」のことに注意させる。

はがきの縦と横の長さくらべについて予想させ、くらべ方を話し合わせる。
・直観的に判断させた後、くらべ方を考えさせる。その際、これまでの端をそろえて並べてくらべらるという方法をヒントにさせるとよい。
・はがきの横を折って縦に重ねればよいことに気づかせる。

はがきの横を折り返して重ねて、長さくらべさせる。
・端をそろえてくらべていることを確かめさせる。

第1時のねらい

・具体物について、2つの長さを直接くらべらる方法をくふうするとともに、長さの観念を養う。

⑨ おおきくらべ

ながさくらべ

どちらがながいかな?

どちらがみじかいかな?

たてとよこをくらべてみよう。

指導のポイント

- この時間の指導のポイントは次の3点である。
- ① これから始まる「おおきくらべ」の単元の導入として、長さくらべという活動に興味や関心をもちさせること。
 - ② どちらが長いか(短い)について、直観的に予想させた後、2つの長さを直接くらべらる方法をくふうし、話し合わせることに。
 - ③ 実際に長さくらべさせること。
- 特に②については、それぞれの児童なりのアプローチを奨励するなかで、端をそろえてくらべればよいこと。縦に横を重ねるよう折ること等に気づかせていくことがたいせつである。

第2時のねらい

・直観的な合わせることのできないものの長さのくらべ方をくふうし、測定の基礎を養う。

直観物を用いて長さくらべは仕方ない

いいえこちらからたせませんか?

たてとよこをくらべてみよう。

指導のポイント

直接重ね合わせることでできないものの長さのくらべ方をくふうさせるなかから、鉛筆や手の指など身近なものを任意単位とし、そのいくつ分といった数値で表してくらべることのよさ、便利さに気づかせることがたいせつである。これは測定の基礎となる考え方で、ノートや本、机の縦、横などの長さくらべを実際にさせるなかで、身につけさせることをねらいたい。

第2時 ねらい

⑩ おおきくらべ (6時間)

準備 (教) 紙テープ(または、ひも)

教室を教室の入り口から出す場合の、机と入り口の長さのくらべ方を考えさせる。
・前時の鉛筆やひも、はがきと異なり、並べたり、折り曲げたりできないことから、紙テープやひもなど身近な材料物を利用してくらべられぬかを考えさせる。
・一方の長さを紙テープやひもでもう一つとり、他方とくらべればよいことに気づかせ、実際にくらべさせる。

机の縦と横の長さくらべの仕方を考えさせる。
・紙テープやひもではなく、指を開いた長さや鉛筆を用いてのくらべ方を考えさせる。
・指を開いた長さや鉛筆を用いてくらべると、「いくつ分」と数値化できるように気づかせ、実際にくらべさせる。

鉛筆や手を用いて、ノートや本の縦横など身近な物の長さくらべさせる。
・「いくつ分」といった数値でくらべることのよさに気づかせる。

サインペン、鉛筆、のりの長さくらべさせる。

- ・縦の線と横の線の間が等間隔であることから、間の数を数えてくらべればよいことに気づかせる。
- ・片端がそろっていることに気づかせ順序づけをさせてもよい。
- ・具体物の形状は長さには関係のないことをはっきりさせる。
- ・具体物のかわりに糊のちがうテープを与え、ノートのまな目などを利用してくらべらる場面をくふうするもよい。



おおきさくらべ

単元の目標

1. 具体物の長さやかさ、広さの比較をとおして、長さやかさ、広さの概念を養う。(B-1)-7)
2. 長さやかさ、広さのくらべ方をくふうさせ、測定の基礎になる考え方を身につけさせる。(B-1)-1)

指導計画

9月中旬～下旬：6時間

ページ	内容	用語・記号	時数
52	・並べたり重ねたりして長さをくらべること ・第三のものを用いたり、基準量のいくつ分て長さをくらべること		1 2
54～55	・一方の水を他方に移したり、第三の容器に移してかさくらべること ・基準量(コップ)のいくつ分かを調べて、かさをくらべること		2 2
56	・重ね合わせて広さをくらべること		1 2
57	・ゲームのなかで、基準量のいくつ分かを調べ、広さをくらべること		1

前後関係

1年	9 おおきく5べ、 ・ 長さくらべ、かさくらべ	8 かさし5べ ・ dl, l, ml
2年	3 長さし5べ(1) ・ cm, mm 16 長さし5べ(2) ・ m	

単元の概説

本単元の構成について

この単元では、「長さ」「かさ」「かさ」といった量について、大小の比較をとおして測定の基礎になる考え方とその概念を養うことをねらいにしている。量の測定については、次のような指導段階を踏まえて指導することがたいせつである。

- ① AとBの大きさを直接的に比較する。(直接比較)
 - ② AとBの大きさを、それと等しい別のものに置き換えて、間接的に比較する。(間接比較)
 - ③ AとBの大きさを、同種のある量を単位として、その何倍にあたるかで数値化して比較する。(任意単位による測定)
 - ④ AとBの大きさを、同種の量の普通単位を用い測定する。(普通単位による測定)
- 以上の段階を、必要感をもたながら児童自身が自ら測定方法を見出し、学習を進めていけるよう単元を構成した。ただし④については2年以降で扱う。

測定の基礎になる考え方について

量を測定するとは、量の大きさを数で表すことである。その表し方は、その量のある大きさや基準量と、そのいくつ分あるかという数値で示すことである。その基準の大きさが単位である。つまり、量を測るとは単位のいくつ分あるかを求めることである。これが測定の原理であり、測定の基礎になる考え方である。

本単元では、量の大小比較を、直接比較から仲介物を使う間接比較へ発展させ、共通の仲介物として単位の必要性に近づけていくようにし、2年以降の普通単位による測定へと自然に発展していくことをめざして指導にあたることをたいせつである。

長さの比較について

2つのものの長さをくらべる方法として、次のような場合が考えられる。

- (1)別々に目で見えてくらべる
- (2)並べて、その差を目をつけてくらべる
- (3)第三のものを利用してくらべる
- (4)基準量のいくつ分という見方であらべくらべる

長さの長短がはっきりしているものは(1)の方法で判断することができる。しかし、長短が容易に判断しにくいものや、2つのものの差がどれくらいかを調べるにあたっては、(1)の方法ではうまくいかない。当然(2)～(4)の方法が用いられることになる。ところどころ(2)～(4)のうち、(2)は一方の端をそろえて比べ、もう一方の端のほうで差をみるという方法で直接的に比較できるのに対し、(3)～(4)は、直接には並べることができなものの(机の縦・横など)で何らかの媒介物によって間接的に比較する方法である。(4)では、任意の単位を定めて長さを数値化する方法を、ものの長さの普通単位 (cm, mm, m, など) を導き出すことになるが、この内容は、2年で学習することになっている。

かさ(いれ物の大きさ)の比較について

いれ物の容量を比較する方法としては、次のような場合が考えられる。

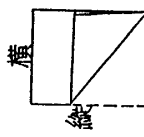
- (1)目で見えてくらべる
 - (2)一方を他方に移してくらべる
 - (3)第三の容器を用いてくらべる
 - (4)コップなどの何ばい分てくらべる
- 長さとかさの測定の方法を区別して示したのは、長さとかさの2つのもので、一方の大きさを直接重ねて比較する(直接比較)のに対し、かさの(2)では、いれ物の容量を水で媒介して(間接比較)、一方を他方に移す仕方になっているからである。

ところで、本単元の主なねらいは、 l や dl を用いて表現する以前に、(1), (2), (3), (4)のいろいろな方法をとおして、いれ物の大きさを比較したり、測定したりする柔軟な経験を与えることである。いれ物の大きさを比較する問題場面に応じて、どの方法がより望ましいかを検討させていく過程の中で、それぞれの比較のあり方を特徴づけるようにしたい。

また、いれ物の大きさを数値化するにあたり、最も基本となることは、コップなどの何ばい分というように、基準となる単位(コップ)を定めて測定することであるから、基準となる単位の定め方をとくに考慮した展開を心がけねばならない。

11月 18日 学年 1 番号 26 名前	課程 中学校 音楽	指導書、指導案、あなたの授業 記録メモを対比して議論せよ。
時間	すぐれた点、あるいは改良すべき点	
9:40	○「長さくらべ」という活動に興味や関心をもたせる	↓ 天気みら外で見つけたものの話題に入り、2本のすずきを出してくる → 生徒達の興味を少し引きつけた
9:45	1. 2本の鉛筆について 生徒達によく分かるように、大きい鉛筆の模型を使って、長さくらべ	
9:50	○直観的に予想させた後、いろいろな子に聞いて、それぞれに発表の場をあたえてあげる ★この発表を聞きながら、「端」をそろえて比べればよいことに気付かせていく。	
9:55	黒板を使って、「端」について教える (一端をそろえる場合、削ってある先でもよいというこども教えられるとよい)	
	実際に筆箱の中の鉛筆を隣の人と比べたりして、生徒達1人1人が「長さくらべ」出来るように促す 2. 2本の系について たのびもじゃおもしろくないから、興味を引きつけるために、身かな魚釣りの糸ということにして、実際に、船やお魚を作ってきて、楽しさを覚えてもらう。	

10:00	この場合、直観的にはなかな比べることが難しいので、またいろいろな子にあって、鉛筆と同じように「端」をそろえることにより、長さくらべが出来るということに気付かせる。
10:05	黒板に貼り付けて、生徒達に理解してもらう 3 はかきの 縦と横について まずは、はかき(手紙)を配る ○1つの物の部分と部分を重ねて、長さくらべをする経験は少ないであろうから、縦と横の位置関係、用語の意味を理解してもらう。
10:10	★ 縦と横が分かるように、赤と青で色分けして、用語を分かってもらえたら、1人1人とその配ったはかきで長さくらべ
10:15	今までの「端をそろえる」というのを参考に、縦と横を重ねるということに気付かせる。
10:20	1人1人か比べているのを見回りながら、「比べる、折る、重ねる」となるといった操作を身につけさせる
	まとめ
	「端」をそろえれば、どんな長さくらべも出来るということをもう1度、黒板や物を使って、おさらいする。 ⇨ 日常生活にも取り入れられる



指導教員
授業者

1. 単元名 大きさをくらべ

2. 単元の目標

- 具体物の長さやかさ、広さの比較を通して、長さやかさ、広さの概念を養う。
- 長さやかさ、広さのくらべ方を工夫し、測定の基礎になる考え方を身に付ける。

3. 単元について

この単元では「長さ」「かさ」「広さ」といった量について、大小の比較を通して測定の基礎になる考え方とその概念を養うことをねらいにしている。量の測定するとは、量の大きさを数で表すことである。その表し方はその量の「ある大きさ」を基準に取り、そのいくつ分あるかという数値で示すことであり、その基準の大きさが単位である。つまり量を測るとは単位のいくつ分あるかを求めることであり、これが測定の原理であり、測定の基礎になる考え方である。量の測定についての次の段階がある。

- ① A と B の大きさを直接比較する。(直接比較)
- ② A と B の大きさをそれぞれ等しい別のものにおきかえて間接に比較する。(間接比較)
- ③ A と B の大きさを、同種のある量を単位として、その何倍に当たるかで数値化して比較する。(任意単位における測定)
- ④ A と B の大きさを同種の量の普通単位を用い測定する。(普通単位における測定)

「長さ」や「かさ」、「広さ」の比較には、いろいろな方法があることに気づかせ、実際に児童が操作していくことで、望ましい方法を選択できるようにさせたい。

4. 児童について

男子 18 名、女子 21 名、計 39 名のクラスである。今まではおもに数(基本的には 20 まで)について学習しており、量や測定についての学習はしていない。ただ、多くの児童が日常生活の中で長さ、かさなどのいろいろな量を意識しはじめており、その大きさを比べる経験もある。

おはじきや数え棒等、具体物を操作しての学習は今までに多く経験しているが、話し合いにはまだ不慣れである。そのため挙手する児童が多く見られても、自分の思いをしっかりと伝えられる児童はほとんどいない。そこで具体物を使い、それを実際に操作させながら話し合いを進め、長さを比較する方法についての理解を図りたい。

5. 指導について

二つのものの長さを比べる方法として次の場合が考えられる。

- (1) 見ただけで比べる
- (2) 端をそろえて比べる

- (3) 第三のものを利用して比べる
- (4) 基準量のいくつ分という見方で比べる
長さの長短がいきなりつきりしてしまいがちな(1)の方法で比べられるが、しかし長短がはっきりしていない場合は(1)ではうまくいかない(2)～(4)を用いることになる。(2)といふのは一方の端をそろえてもう一方の端のほうで差をみるといったような、直接的に比較できる方法である。またそれに対し、(3)～(4)は直接的には並べることができないもの(紙の線、構など)で、なんらかの媒介物によって間接的に比較する方法である。(4)は任意の単位を定めて、長さを数値化する方を経て、ものの長さの普通単位 (cm, mm, m) を導き出すことになるが、この内容は 2 年で学習することになる。

今回は(2)の方法において、身近にある具体物を考えていきたい。そのために、長短の区別がつきにくい鉛筆やひもを用意して、2 つのものどをどのようにして比較するかを考えさせたい。また、はがきのように 1 つのもの部分と部分を重ねて長さの程度を示す経験は、そう多くはないはずである。したがって、はがきの場合は縦と横の位置関係、用語の意味をテープ等を使い、正しく理解させたい。鉛筆、ひも、はがきのいずれも端をそろえたいことを強調していきたい。

6. 指導計画 (6 時間配当)

第 1 次	ながさくらべ	直接比較 間接比較	任意単位による比較	1 時間 1 時間
第 2 次	かさくらべ	直接比較 間接比較	任意単位による比較	1 時間 1 時間
第 3 次	ひろさくらべ	直接比較 間接比較	任意単位による比較	1 時間 1 時間

7. 本時の目標

具体物について 2 つの長さを直接比べる方法を工夫し、長さを比べることができ

る。

教師用…えんぴつ (模型、揭示用) はがき (揭示用) ひも (揭示用)

児童用…ピコ はがき

9. 指導過程

期	学習内容	学習活動	指導上の留意点
つ	学習内容の把握	○長さ比べをすることを知る。	○長さが大きく異なるものを用意し、長さの違いを意識させる。
か	2 本の鉛筆の長さ比べ	○2 本の鉛筆を見て「どちらが長いか」を考える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">どちらが長いかはっきりさせるにはどうしたらよいらしいょう。</div>	○鉛筆の大きな模型を使い児童に操作させながら、話し合いを進める。

11. 反省

深める	<p>○比べる方法について話し合う。 ●直感 ●並べる。 ●端をそろえる。</p> <p>○隣同士で鉛筆の長さ比べをする。</p> <p>2本のひもの長さ比べ</p> <p>はがきの縦と横の長さ比べ</p>	<p>○比べる方法について話し合う。 ●直感 ●まっすぐのぼす。 ●端をそろえる。</p> <p>はがきの縦と横の長さほどちがいが長いでしょう。</p> <p>○比べる方法について話し合う。 ●並べる。 ●重ねる。 ●端をそろえる。</p>	<p>○机間巡視し、並べ方を観察する。</p> <p>○ひもをつり糸にたとえることで、学習への意欲化を図る。 ○ひもをいろいろ操作させて長さを比べさせたい。</p> <p>○縦と横の位置関係をテープを使ってはつきりさせる。 ○はがきを折ったり、重ねたりしたものを提示することで、様々な方法があることに気づかせる。</p>
広げる	<p>3本以上の色鉛筆の比較</p>	<p>ピコの長さを比べましょう。</p>	
まとめる	<p>本時のまとめ</p>	<p>○長さの直接比較の方法をまとめる。</p>	<p>○一端をそろえてならべると長さが比較できることを確認する。</p>

12. ご高評

10. 授業の観点を子供たちが長さ比べの基本である“端をそろえる”ということをも、操作活動を通して理解できたか。操作活動を通して、一人一人が意欲的に学習に取り組んでいたか。

平成5年11月25日 第3校時
指導教官 福井太郎(算)
授業者

1. 単元名 おおきさくらべ (なかさくらべ)

2. 単元の目標

具体物の長さやかさ・広さの比較をとおして、長さやかさ・広さの概念を養う。
長さやかさ・広さのくらべ方をくふうさせ、測定的基础になる考え方を身につけさせる。

3. 単元について

1.) 教材について

この単元では、児童が、長さ、かさ、広さといった、量について、大小の比較をとおして、測定的基础になる考え方とその概念を養うことをねらいとしている。量の測定については①直接比較②間接比較③任意単位による測定④普通単位による測定と大まかにわけて4つの段階を踏まなければならないが、④については、2年以降で行うので①～③の指導を重点的に行う。①～③の段階を踏んで発展させることは、量を測定する(量の大きさを数で表す)つまり単位のいくつ分あるかを求めるという測定の原理、基礎になる考え方へとうなげ、2年以降の④の課題へと自然に発展していくことをめざしている。

※ 特に長さの比較について

長さの長短か(はきりしているもの) → 別々に目で見て比べる。

↓
長短が容易に判断しにくいもの } → 並べてその差に着目。
2つのものの差がどれくらいか。 } → 第3のもの基準量を利用して比べる

↳ (任意の単位使用、普通単位は2年以降)

上のような指導を段階的に行う。

2.) 児童について

目で見て比べる。 } ほぼ全員可能。
並べる(重ねる) } 7クラスの約2/3は可能に思われる。
第3のものの使用。 }
基準量の使用。 } ? (おそろく思いつかないか。いても数人程度)

長さを比べるということに対して、その方法について着目すると、初段階までの認識しかない子も見られるようだが、くらべるということかできない子は、いないように思う。

3.) 指導について

- 身近なものを題材に、その中で、比較可能なものをとり上げて、比較させる。
- 興味関心をもたせるため (ex. 散歩(丁子)筆記用具(鉛筆)釣り(釣り糸)葉書(縦横))
- まず直観的に予想させた後、直接比較の方法をくふうさせる。(並べる・重ねる)
- 実際に長さくらべさせる。
- 重ね合わせることでできないものの長さのくらべ方をくふうさせる中から、身近なもの(鉛筆・指)を任意単位とした測定法のよさや便利さに気付かせる

4. 指導計画

第1次 なかさくらべ ... 2時間 (本時 1/2)
・ 並べて重ねたりして長さをくらべる
・ 第3のものを利用したり基準量のいくつ分で長さを比べる。

第2次 かさくらべ ... 2時間
・ 一方の水を他方に移したり第3の容器に移してかさくらべる。
・ 基準量(コップ)のいくつ分かを調べてかさをくらべる。

↓
くらへ

第3次 ひろすくらべ ... 2時間
 ・重ね合わせて広さをくらべる。
 ・ゲームのなかで基準量のいくつ分かを調べる広さをくらべる。

5. 本時の目標.

並べたり重ねたりして長さをくらべることをできるようにする。

※この際、はしをそろえるということ、まっすぐでないものはまっすぐに伸ばしてくらべるということを忘れずにできる。

6. 準備物.

すずき、鉛筆の模型、釣リ糸(それに値するひも)葉書(教師用(3)児童(各1))

7. 本時の学習指導過程.

時間	教師のはたらきかけ	児童の反応	留意点
3分	散歩を話題にすずきとリあげなかくらべの導入をはかる。	散歩のときの楽しかったことやすずきの遊び方を口々に言う。	話すまじつ、できようなどこころはやくすりあわせる。
10分	鉛筆の模型をとり出してながさをくらべさせる。 留意点を板書して確認	どちらが長いかな直観的に判断し口々に言う。 直接的に比べる方法を実際にやってみながら話し合う	実際に各自の鉛筆でくらべさせて確認すること。
15分	釣リ糸を提示してまっすぐでないものの長さを比較する。すずきまっすぐにする板書でポイントをはしをそろえる。おぼえる。	まっすぐは直観で判断し、鉛筆の要領で段階をふんで徐々に正解に近づいていく。	まっすぐにのびして、はしをそろえるというポイントをおぼえさせる。
15分	葉書の縦と横をくらべる	口々に直観的な反応測定法をくふうする。	重ねあわせることのできないものの長さをくらべる方をくふうさせる方向へも持っていくことがよい。
2分	本時のまとめ		

8. 授業の観点

9. 反省

10 御高評

資料9 1年 算数学習指導案

中学校音楽

1年

1. 単元名：長さくらべ

2. 単元の目標

具体物の長さやかさ、広さの比較をとおして、長さやかさ、広さの概念を養うとともに、測定の基本を考えさせる。

3. 単元について

児童は、この単元で、「おおきさくらべ」の中から「長さくらべ」の学習をする。大きなポイントとしては、「これから始まる長さくらべに興味をもたせること」「とららが長いかにについて、直観的に予想させた後長さくらべの方法について話し合わせること」「実際に長さくらべさせること」があげられる。指導者としては、日常生活でも児童が長さくらべ出来るように、位置関係や用語をしっかりと教えたい。

4. 児童について

児童はすでに日常生活でいろいろな長さや量について、意識したりする経験をもっている。また、この単元では、実際に目で見たり、手に触れたり出来る長さがあるから、児童も関心をもつであろう。しかし、1つの物の部分と部分を重ねて長さの程度を示す経験は少ないだろう。

5. 指導について

- ・身のまわりのよくありふれたものを、立体的にしたり、そのまま使ったり、見やすいように拡大したりする。
- ・なるべく1人1人の児童に発表の場を与えて、考えをふくらませる。
- ・途中で隣の人とするようにゲームなども取り入れる。
- ・縦と横をかかふるように色分けしたり、1人1人に配れるように用意しておく。

6. 指導計画

- ① なかさくらべ … 2時間 (本時 1/2)
- ・並べたり重ねたりして長さをくらべること
 - ・第三のものをういたり、基準量のいくつ分で長さをくらべること
- ② かさくらべ … 2時間
- ・一方の水を他方に移したり、第三の容器に移してくらべること
 - ・基準量のいくつ分かを調べて、かさをくらべること
- ③ ひろさくらべ … 2時間
- ・重ね合わせて広さをくらべること
 - ・ゲームの中で、基準量のいくつ分かを調べ、広さをくらべること

7. 本時の目標

具体物について、2つの長さを直接くらべる方法を工夫するとともに、「長さ」という観念を養う

8. 本時の学習指導

時間	教師のはたらきかけ	留意点
10分	<ul style="list-style-type: none"> ・「長さくらべ」という活動に興味や関心をもたせるとともに、鉛筆について ・黒板で「端」について教える ・ふよとしたゲームを試してみる 	<ul style="list-style-type: none"> ・2本のすずきを使って、興味をもってゆらえれば… ・生徒陣によく分かるように、大きい鉛筆の模型を使う ・「とららが長いかに」をできるだけ多くの子に発表させてあげる
20分	<ul style="list-style-type: none"> ・2本の系について ・「端」についての応用 	<ul style="list-style-type: none"> ・筆箱の中の鉛筆を隣の人と比べさせて、「長さくらべ」が出来るようにする ・身近な魚釣りの糸とくわいとして、船やお魚を作ってきて、楽しさを覚えてもらう!

10. 反省

11. 御高評

30分	<p>・黒板にひもを貼りつけて、生徒達に理解してもらおう <はかきの縦と横について></p>	<p>・たくさんの子にあてて、鉛筆の時と同じように発表させる</p>
40分	<p>・はかきを配る ・“縦”と“横”の位置関係、用語を教える</p>	<p>・縦と横が分かるように赤と青で色分けして、用語を分かっってもらえたら、1人1人に実際長さをくらべてもらう ・今までの“端をさるえる”というのを参考に縦と横を重ねるということに気付かせる</p>
45分	<p>1人1人が比べているのを見回す ・最初からおさらい</p>	<p>・「比べる、折る、重ねる」などといった操作を身につけていこう ・日常生活にも取り入れられる!!</p>

9. 授業の観点

- 長さくらべという活動に興味や関心をもたせる。
- “とろろが長い丸?”について、予想させた後、方法などを話し合わせる。
- 実際に長さくらべをさせる。

学年 1 課程小学校番号 93010871 | 名前

- ①メディア・ミックスとは何か、解説せよ。
 ② 君の授業ビデオの部分について、メディア・ミックスの観点を加味した、実行可能な別の指導案を作成せよ。
 ③ その指導案のセーブルス・ポイントと弱点(ウイーク・ポイント)を解説せよ。
 ④ 提出先：教育実践研究センター2階 大野木教官室前
 (大学正面からみて噴水左2階建物、部屋の前に場所を準備します。)
 ⑤ 期限：2月10日(木)午後3時まで
 (提出は10日の朝からにしてください。)

① メディア・ミックスとは何か。辞書的用語で言えば、効果的な広告媒体の組み合わせとでも言ったところか。しかし、これではあまりに味気ない。そこで、講義で与えられた資料と私なりに調べたことを整理し、まとめてみたいと思う。

今や、我々は高度情報社会の中に生活している。こうした社会に生きる人間にとってはそのような社会に相応しい新しい知恵と技術が必要とされる。誤情報に惑わされず、また自らの考えをこれ等の情報手段を用いて表現し、社会を動かしていく……もしくは、多様なメディアを活用して自ら学習することが出来る——そんな能力を身に付けることはこれからの社会を生き抜く為に必要不可欠だ。こういう状況の中、この情報化に対応する教育の必要性が生れてきた。メディア・ミックスの考え方は、この方向にそったものであろう。増大する学習方法情報を駆使し、そこから新しい意味発見の出来る子供を育てる為に、様々な学習方法を開発する——このねらいを達成する為の方法論の中の一つが、メディア・ミックスである。伝統的なコミュニケーションの手段についての力とともに、新しい手段についての力を身に付けさせようというのだ。

ところで、メディア・ミックスは、ハード(機器・教材等……映画、VTR、スライド OHP、オーディオ、コンピュータ)の組み合わせ方よりも、そこに盛り込まれたメッセージ(情報・内容等)そのものに主眼を置くものだ。そして、各種のメディアを授業の中に取り込んでいくことよりも、その中に含まれているメッセージの相乗効果に期待を込めている。資料にある水越敏行氏のメディア・ミックスへの概念規定を簡単にまとめると次のようになる。I 単品の刺激体、単一媒体では期待し得なかつたものを、教師・児童生徒が組み合わせや重ね利用にすることにより、新しい質の刺激体を作り出す。II 児童生徒の実態と教師の教材解釈および授業のねらいなどによって、基幹メディアと副次メデ

ィアを最終的に教師が決める。III 伝達されるメッセージと取り扱う情報の側から複合を考えるが、多媒体利用とか多感覚提示を主眼にしたものではない。

この辺りで、メディア・ミックスがどのようなものであるかの説明が終えられると私は思う。そこで、今度はメディア・ミックスを用いた授業を考えてみよう。メディア・ミックスの授業では、授業のねらいに即した質の良い複数の学習情報を通して、子供達の学習行動を活性化させ、子供達自身が情報を比較して意味発見をすることを大切にすること。こうした理想的メディア・ミックス授業を創り出す為に、無視し難い留意点が幾つか挙げられる。それを、資料に沿って述べてみたい。I 多くの学習情報を入手し易い形に、学習環境を整備すること。II 多くの学習情報を対立させ、メディアの組み合わせから思考や情に、メッセージを重ねることにより得られるであろう効果を重視。III メッセージの持つ特性や効果を考慮し、メディア・ミックスの授業は教師の個性や力量が問われる。IV 子供の実態を正確に分析した上での授業設計。V 意図的な学習メッセージで授業の流れに屈折場面を作り 授業を活性化すること。VI 学習者の思考や情意の変容状況を予測 VII 教材分析として映像メッセージの分析と検討。VIII 教師だけでなく学習者自身も情報の選択や活用が出来る場の心掛け。IX 複合メディアを駆使する新しい映像リテラシーの育成。X メディアミックスを全ての教科教育に係る多情報化時代の教材として、広く一般性を持たすべく検討すること。

このように十項目に渡って、メディア・ミックスの授業についての留意点を簡潔にまとめてみたのは、私なりの考えがあったからだ。メディア・ミックスを解説理解する為にはメディア・ミックスが何たるかを、知るだけでは不十分だと思う。つまり、メディア・ミックスの魅力や長所だけを知っても、それはメディア・ミックスの展開には繋がらない。メディア・ミックスの抱える問題点や欠点などを明確に知ってこそ、発展進歩が有り得ると考えるのだ。メディア・ミックスにとどまらず、様々な身近な物事を客観的に、かつ多面的視点から眺める事が今、私達に求められていると思う。清濁あわせのみ、諸な現実に耐え得る器量が必要ではないだろうか? 少々、話題が逸れてしまっただが、以上が私なりの、メディア・ミックスの解説である。

② 第1学年 算数学習指導案

平成6年2月4日(金)

指導教官
 授業者

1. 単元名 大ききくらべ(長きくらべ)

2. 単元の目標

- * 具体物や長さやかさ、広さの比較を通して、長さやかさ、広さの概念を養う。
- * 長さやかさ、広さのくらべ方を工夫させ、測定の基礎になる考え方を身に付ける。

3. 単元について

この単元では「長さ」や「かさ」や「かさ」といった量について、大小の比較を通して測定の基礎になる考え方とその概念を養うことをねらいにしている。量を測定する（量の大きさを数で表す）つまり単位の幾つ分あるかを求めるという、測定の原理、基礎になる考え方へとつなげ、2年以降の課題へと自然に発展させることを目指している。量の測定については、次のような段階を踏まえて指導することが大切である。

- ① AとBの大きさを直接的比較をする（直接比較）
 - ② AとBの大きさをそれぞれ別のものにおきかえて、間接的比較をする（間接比較）
 - ③ AとBの大きさを同種のある量を単位として、その何倍にあたるかで比較する（任意単位による測定）
 - ④ AとBの大きさを同種の量の普通単位を用いて測定する（普通単位による測定）
- 以上の段階を必要感を持ちながら児童自身が自ら測定方法を見出し、学習を進めていけるよう単元構成されている（ただし、④は2年以降で扱う）。

4. 児童について

男子〇名、女子〇名、計〇名のクラスである。授業中の発言も活発で比較的積極的な児童が多い。児童は粘土で作った蛇で長い、短いを話し合うなど、既に日常生活で色々な量について、その大小を意識したり比べたりする経験をもっている。

5. 指導について

就学前の多様な経験などを正確にとらえ、それに対応できる具体的な活動や操作をメディアを利用して工夫する。更に、メディアからその情報を読みとれるようにも指導しながら、児童ひとりひとりに充実した学習を組み立てたい。

ここでは二つの長さの量を比較して表す場合を学習する。長さを比較する操作を何回も体験させ、メディアを使った情報の伝達で、長い短いを感覚的、視覚的にとらえる豊かな経験を意図的に積み重ねたい。また、児童同士を話し合わせることによってコミュニケーションの確立にも意識を配りたい。

6. 指導計画

- 第1次 ながさくらべ……2時間
並べたり重ねたりする直接比較 (本時) 1時間
第三のものを利用したり、基準量の幾つ分かを比べる間接比較 1時間
- 第2次 かさくらべ……2時間
一方の水を他方に移したり第三の容器に移してかさ比べる直接比較 1時間
基準量（カップ）の幾つ分かを調べてかさ比べる間接比較 1時間
- 第3次 ひろさくらべ……2時間
重ね合わせて広さを比べる直接比較 1時間
ゲームの中で基準量の幾つ分かを調べて広さを比べる間接比較 1時間

7. 本時の目標

具体物について2つの長さを直接比べる方法を工夫すると共に、長さの概念を養うこと。更に、メディアから情報を引き出す技術を身に付けさせること。

8. 準備物

教師…鉛筆（模型、揭示用）、葉書（揭示用）、ひも、OHP、テレビ、ビデオ
児童…葉書

9. 本時の学習指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点
鉛筆の模型を取りあげ、長さ比べの導入を計る	* 2本の鉛筆を見て「どちらが長いかわか」を考える。 * どうやって比べたか発表させる。「どのようように比べましたか。」「他に方法があったら発表して下さい」	* 長さが大きく異なるものを用意。大きな模型で児童の長さ比べへの関心を高める。 * 鉛筆は直観的に比べられないように配置。
	* 比べる方法について話し合う。～見ただけで分った～並べてみたら分った	* 鉛筆を比べる時には何故端を揃えるのか。

		<p>* 注意点を板書して確認。</p> <p>* 実際に各自の鉛筆で比べさせて確認。 * 机間巡視。</p>
展開	<p>OHPの使用 2本の紐の長さを比べをする</p> <p>OHPに2本の紐のシルエットを移す。蛇のようにうねらせたり、数回かたちを変え「どちら長い」予想させ、児童に話し合わせる。 ～見ただけで分った。 ～まっすぐ伸ばす。 ～端を揃える。 * 注意点を板書して確認。 * 葉書を見て「縦と横の比べ方」を考える。 ～見ただけで分った。 ～葉書を折って比べる。 ～葉書を二枚並べる。 * 注意点を板書して確認。</p>	<p>* 紐を蛇にたとえ、学習への意欲化を図る。 * 紐をOHP上で操作させて長さを比べさせたい。 * 直観的に把握できない場合の比較方法を考えさせたい。 話し合いでコミュニケーションの発達を促したい。 * 端を揃える事、まっすぐ伸ばす事を押えさせたい * 葉書を真似た模造紙で縦と横とを色ペンで示してはっきりさせる。 * 各自に作業をさせながら考えさせる。隣の者と話し合わせる。 * 机間巡視。 * 様々な方法がある事に気づかせる。</p>
まとめ	<p>本時のまとめ。 テレビ、ビデオの使用。</p> <p>NHK教育テレビの一年生算数番組15分間の内、本時の部分だけを見せる。</p>	<p>* ビデオの進行と共に、授業でやった事を口にして内容を思い出させる。 * 復習の意味で児童に再確認させたい。 * 映像のメディアから、長さ比べの情報を引き出させたい。</p>

	<p>* 番組の続きを知りたがる児童に番組を録に、次の授業の内容を伝えておく。</p>	<p>せたい。 * ビデオの続きを暗示するような事を言い、次の授業への意欲を高めたい</p>
--	---	--

③～まず、この指導案のセールス・ポイント。

自分で作った指導案なのだから、自信をもって売り込めればいいのだが……。なかなか難しいのである。たとえば——この指導案を束にして麴に詰め込み、家々を巡り歩く「奥さん、ちょっと耳よりな話があるんですよ。いえ、大した話ではないですけどね。ええ、聞かなくても貴女の人生どうこうなるとかそういう大袈裟な話じゃありませんから、でもねえ、聞いておかないとPTA会議でお友達のお友達の奥様方と話が通じないかもしれないよ……いえ、たええですけど。でも、会話に加われない貴女が仲間外れになって、誤解が生れ、それが貴女の大切なお子さんの学校生活に影響するかも……ほら、最近いじめとかか流行ってますでしょう？ 貴女のせいでもしそんな事になったら、お子さんは可哀想ですよええ。将来、非行に走って家庭内暴力の原因になるかも。そう言えば、子供が虐待で父親を刺し殺し、母親に大怪我させたって事件があったようですよ。いえ、私は貴女にこの指導案を買えと強制している訳ではありません。ただ、将来の事を考えてみると心配なだけで。まあ、そんな不安そうな顔をなさらないで下さいよ。私も貴女のお気持ちを察しますわ。私にも子供がいましてね、ええ。じゃあ、どうでしょう。私の指導案の説明、聞くだけでも聞いてみませんか？ 買うと買わないとかは別としまして。よろしいですか？ それでは、ちょっと御免下さいませ……。実はね、奥さん。この指導案には物凄いセールス・ポイントがあるんですよ？ 」などと決して売り込めないのでは

気分転換をしたところで、真面目に述べたいと思う。この指導案の最大のセールス・ポイントと言えば、やはり「まとめ」の部分でビデオを使用した事であろう。講義の時に見た映像では、授業の主要なメディアとしてビデオを使用していた。授業中に見た番組「みんな地球人」について、討論したり児童の情緒発達を図っている。この授業では、ビデオを中心に授業が構成されていた。しかし、私の立てた指導案でのビデオは、ごく補助的な役目を果たしている。授業に占める割合こそ小さいが、重要な存在なのだ。授業中、実際に児童が手を動かして「長さ比べ」をする。これは非常に能動的な作業だ。身を以て体験する授業だ。だからこそ何をしたらかは覚えていても、それが何であったか、つまりどういう事だったのか、子供ははきまりと認識できていない。これは私にも経験がある。理科の電流を学ぶ授業で懐中電灯を作っても、それがどういふことを意味しているか分かっていなかった。友人達と話し合いながら試行錯誤で一生懸命に懐中電灯を作った。しかし、電流

のことは学べていなかった。これと同じ状況が、一年生の「長さ比べ」の授業だと思う。いくら途中で注意点を板書しても、この騒がしい作業の間に言われた事など、小学校一年生の彼等には理解していただけないだろう。だから、最終的段階のまとめの時点で、しっかりと落ち着いた状況にした児童に情報を改めて与え直さなければならぬ。その情報の与え方についても、教師が黒板で説明するより、それ専用で作られた教育番組のビデオを利用すべきだと思うのだ。あの教育番組は我々大学生でも食い入るように鑑賞してしまっていたのである。この教育番組の本時部分だけを児童のまとめ段階に使用し、続きを見せないことによって「おあずけ」状態を作り、次の授業への意欲を高めさせる……メディアをこのように使用しても教育的意義には反しないのではないか、と私は思う。ただ、その教育番組の定期的使用に著作権が絡んだりするかどうかはよく分らない。

ついでにもう一つ、セールス・ポイントを挙げるとするならば、「紐の長さ比べ」でOHPを用いた事であろう。ペラペラした透明のOHPシートに何やら書き込んだりするOHPの由緒正しい使用方法があるが、それだけがOHPではない。影絵にもなるのだ、OHPは。そこで、今川慎世君が使った1m以上もある紐を2本も用意する代わりに、手の平サイズのただ紐2本を拾ってきて、それをスクリーン一杯に映す。とっても大きい紐になるのだ。そしてその紐は黒板に苦勞して張り付けなくとも、スクリーン上を蛇のようにニヨロニヨロ自由自在に動く。体の小さい一年生児童も一人で簡単にその巨大な影絵の蛇を動かす、真直ぐに揃えることも出来るのだ。この手堅さと、紐の視覚的效果に於ける迫力性、紐=蛇の遊び心。これ等をセールス・ポイントと言わず何と言おうか？

～指導案の弱点。

今まで些細な事をさも大事件かのような誇大表現で、セールス・ポイントに仕立てあげてきたが、弱点ともなると誇大表現を使わなくとも弱点となりうる。

まず、「メディア・ミックスを加味した指導案」の作成を要求されているにも関わらず私の指導案に於けるメディアの登場は少ない。更に、機材の設置が大変そうな物をメディアに運んでいる。ビデオとOHP……。OHPともなれば、スクリーンがなければならぬ。スクリーンを下ろし、固定する。重くて巨大なOHPを廊下から引きずって行く。OHPの台のキャスターがしっかりしていればいいが、学校の備品など信用できない。教室の入口の段差で蹴つまずき、教卓にぶつかって台の上のOHPが落ちかける。そしてスクリーンの前にOHPを置く為に、そこに座っている児童を机ごと強制移動させねばならぬ。教室に於ける地あげ屋の登場だ。そして、OHPの使用時にはカーテンを引き、電気を消す必要がある。児童に頼むとは言え、一年生では危なっかしいこと限らない。次にビデオを見る時だが、これもなかなか大変だ。この非活動的なOHPをどかし、重いビデオを設置する。ビデオの設置は前以って出来る作業かもしれないが、映りの良かったことのない年代物テレビに綺麗な映像を結ばねばならぬ、という難業がある。映りが悪ければ児

童の文句や「先生、どうして綺麗に映らないの？ 家のはもっと綺麗に映るよ。どうしてどうして？」と児童の無邪気な質問が、津波のように襲いかかってくることも間違いない。よって、これは実行可能だろう指導案だが、トラブルなしに遂行できる指導案ではないであろう。現実的に考えれば、メディア機器は一つに限るべきかもしれぬ、もし学校設備の整っていないところなら、少なくとも私が通った当時の小学校は、前記のような設備状況だった。

とにかく、この指導案の弱点は①メディアの使用不足。②メディア機器の運用に問題有り、もしくは、メディア機器選択への現実的配慮の欠如。であろう。しかし、①と②は相反する弱点である。①を改善する為には大幅なメディア機器投入が求められ、現場に於ける混乱が目に見える。そして、②を改善する為にはメディア機器の削減が要求され、従って、メディア不足という①の弱点を生じさせる。そうすると、これらのウロボロス（御存知でしょうが、己を喰らいあう蛇の事です）状態を脱却するには、この指導案を無に返すという残酷な方法しか見当たらない。しかし、とても苦勞して作った指導案だ。そんな事は出来ない……やりたくないもので、ここは弱点は弱点として残して置き、次回の指導案を書く機会に参考にしたと思う。幸い、私はまだ一年だ。教育実習の行われるその日まで、より内容のある指導案を書けるよう努力したい。

4. 児童について

男子18名、女子21名、計39名のクラスである。今まではおもに数(基本的には20まで)について学習しており、量や測定に力を入れた学習はしていない。ただ、多くの児童が、日常生活の中で長さ、かさなどいろいろな量を意識しはじめたり、その大きさを比べる経験もある。

おはじや教え棒等、具体物を操作しての学習は、今までに多く経験しているが、話し合いにはまだ不慣れである。そのため、考えやすい児童が多く見られるも、自分の思いを、きりと伝えられる児童はほとんどいない。そこで、具体物を使い、それを実際に操作させておぼえながら、話し合いを進め、長さを比較する方法についての理解を図りたい。

5. 指導について

二つのものの長さを比べる方法として次の場合が考えられる。

- (1) 見ただけで比べる。
- (2) 端をそろえて比べる。
- (3) 端三のものを利用して比べる。
- (4) 基準量のいくつか分という見方を比べる。

長さの長短かは、きりしていない場合は(1)の方法で比べられるが、しかし長短かは、きりしていない場合は(1)でほうまくいかなないので、(2)^(4)を用いることになる。(2)というのは一方の端をそろえてもう一方の端のほうを差をみるというように、直接的に比較できる方法である。また、それに対し、(3)^(4)は直接的には並べることのできないもの(机の横、横など)で、ふんちの媒介物によって間接的に比較する方法である。(4)は任意の単位を定めて長さを数値化する方法を指す。この内容は、2年生で学習することになる。今回は(2)の方法において身近にある具体物を考えたい。そのため、長短の区別がつきにくい鉛筆やひもを用いた。2つのものをどのようにして比較するかを考えた。また、はがきのように一つのものの部分と部分を重ねて長さの程度を示す関係、用語のしずである。したがって、はがきの場合は、縦と横の位置関係、用語の意味やテープノール等を使って、正しく理解させた。鉛筆、ひも、はがきのいずれも、端をそろえるということを強調していきたい。

6. 指導計画 (6時間配当)

- 第一次 ながさくらべ
- 第二次 かさくらべ
- 第三次 ひろさくらべ

直接比較、任意単位による比較
 間接比較、任意単位による比較
 間接比較、任意単位による比較
 間接比較、任意単位による比較

(本時) 各1時間

7. 本時の目標

具体物について2つの長さを直接比べる方法を工夫し、長さを比べることが出来る。

8. 準備物

教師用… パソコン、絵カード、はがき(掲示用)、ひも。

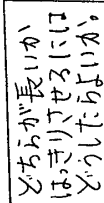

児童用… ひも。

9. 指導過程

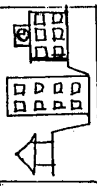
過程	学習内容	学習活動	指導上の留意点
つ	学習内容の把握 自分が思う「長いもの」を口々に言わせて比較(この時期から恐らく気懐に新しい編み針の網や体育の時に使うおわらや男の子自分の髪を縫う長さなど身近なものを使って導入を図る。)	長さを比べることを知る。 自分が思う「長いもの」を口々に言わせて比較(この時期から恐らく気懐に新しい編み針の網や体育の時に使うおわらや男の子自分の髪を縫う長さなど身近なものを使って導入を図る。)	長さが大きく異なるものを留意し、長さの違いを認識させる。
か	絵カードくらべ	絵カードを用意して、ちのカードに書かれている物のほうが長いか、ということをつくかする。 	つかみの部分 写真などを活用したカード。
む			
(5分)			

学年 1 課程 小学 番号 177 名前

①メディア・ミックステとは何か、解説せよ。
 ②今川健世君の授業ビデオの部分について、メディア・ミックステの観点を加味した、実行可能な別の指導案を作成せよ。
 ③その指導案のセーブルス・ポイントと弱点(ウィーク・ポイント)を解説せよ。
 ④提出先：教育実践研究センター2階 大野木教官室前
 (大学正面からみて噴水左2階建物、部屋の前に場所を準備します。)
 ⑤期限：2月10日(木)午後3時まで
 (提出は10日の朝からにしてください。)

2本の直線の長さくらべ	2本の直線を見て、「どちらが長いかわかそうか」を考える。  どちらが長いかわかそうか どちらが長いかわかそうか 比べる方法について話し合う。 ・直感 ・並べる ・端をそろえる 鉛筆を隣どうして比較することによって確認する。	パソコンに線を二本映し出して、どちらが長いかわかそうか  どちらが長いかわかそうか どちらが長いかわかそうか 板書して、しっかり確認する。観察も忘れずして理解度を把握させる。 好きな長さのひもを各自で用意させる。 (各自両手をひもを伸ばして長さを競争させること)で意欲化を図る。 自分で操作させる。各自の応用カに注目したい。
-------------	--	--

深める . 広げる

深める	建物の比較 (一人一人の身長比べ、で良いと思う)	一等賞は誰だったでしょう。 どのゼルが一番高いでしょう。 比べる方法の比較 ・直感 ・下(端)をそろえる。	児童の操作を守る。 ポイントの再確認。 パソコンに下図のような画面を映し出して比較させる。 
広げる	はがき(知)の縦と横の長さくらべ	はがき(知)の縦と横の長さは、どちらが長いでしょう。 比べる方法について話し合う。 ・並べる ・重ねる ・端をそろえる。	ポイントの再確認。 縦と横の位置関係や、テープ等を使ってはがきを折ったり重ねたりしたものを見せたり、はがきを折ったり重ねたりしたものを見せたり、不正に言いかせたり、(知)は、日算の掃除や学習の際の班編成時等で、ポイントになる可能性があるので、一端をそろえて比べることと長さ比べできないことを確認する。

38分
まとめ

10. 授業の観点を子供たちから長さを比べる基本である端をそろえる。というところを操作活動を通して理解できたか、各段階的に学習に取り組んでいくか、特に、個々の自主性を尊重し、得意な方法で決めたいという思いを大切に何にでもまかせ、やらせてみる。一日一頁の授業をとおして、個々の応用能力を良くしたい。

11. 反省。
 12. ご高評
 →ウラハ

③ 指導案のセールスポイントと弱点、

セールスポイント

- ・授業の進捗状況によって変更するところができる。(重視する)
- ・個々の興味を最もひくものを使ってできる。(重視する)
- ・パソコンを使うことで情報社会に対応する機器に交した便益をつけることができる。
- ・除々に個々が操作・観察する機会を状況により調整することができる。(個々の応用・洞察能力に注目。助長したいと思ってる。)

ワイーク・ポイント

- ・パソコンを操作は、担任に委ねられていて、児童が関与しない。
- ・児童の意見やパソコンに反映できるところかできないか。
- ・できない意見が出た時のことを考慮に入れる。
- ・時間内にできない可能性の方が高い。

長さは「高さ」に置き変えることができること。

メディア・ミックスについての理解が不十分で、やはり、加味した実行可能な別の指導案はできません。